

優秀修士論文概要

余華の短篇作品における小説技巧

——「虚偽の形式」はいかに構築されるか——

岡 崎 至 秀

本研究は、1980年代後半から実験的な手法を用いて創作を行った余華の短篇作品を対象とするものである。研究の背景にある問題意識は、技巧に注目した先行研究に限っても、テキスト分析のアプローチがマイナーな領域に留まっているところにある。さらに、物語論の知見が生かされた研究も、技術の分析のみに終わるか、テーマ論的な帰結に行き着くものかのどちらかとなっている。

この問題を受けて本研究は、テキストから分析的事実をうえて、物語内容と物語形式の關係に踏み込み、小説全体の技巧という観点から考察をする。これにより、先鋒文学という言葉から「難解」で「不可思議」といったイメージが抱かれがちな余華の小説に対して、一貫した論理があることを示すのが第一の目的である。そして実験的な先鋒期の短篇小説と長篇小説執筆を経たりアリズムへの転折以後の短篇小説を比較し、その同一性と差異を見通すことで、小説技巧の展開を明らかにすることが第二の目的である。

分析の手がかりとして、余華がエッセー『虚偽的作品』（『上海文論』1989年第5期）で提示した「虚偽の形式」という概念を使用する。余華は「虚偽の形式」を意識して執筆を行い、先鋒期の第一作目となる『十八歳の旅立ち』が誕生した。「虚偽の形式」とは日常的な生活経験の場としての現実の秩序と論理に反しながら、自由に「真実」を追究するための手法であると言う。「虚偽の形式」とは果たしていかなる技法であり、それを用いて描かれる「真実」とは何か、これらが読解を進める鍵となる。本論の構成は第一章、第二章、第三章は先鋒期の始まりとなる三つの小説をそれぞれ取り上げ、第四章と第五章は転折以後の二つの小説をそれぞれ取り上げている。第六章はそれらの分析を踏まえて「虚偽の形式」という観点から俯瞰した本論の結論にあたる。以降、各章で示される分析の過程は全てテキストに基づいた見解であるため、引用や細かい説明を省くと聊か抽象的になりすぎてしまうが、簡単にまとめていくことにする。

第一章は『十八歳の旅立ち』（『北京文学』1987年第1期）の分析となる。このテキストには対称性という論理形式が一貫して働いている。物語の後半では、主人公であり語り手の「私」と旅を共にする車がイメージの次元において対称であることが分かる。主人公と車に三度訪れる暴力と強盗の波が両者に強い相関があることが示唆され、最終的に主人公と車は互いにイメージを通して描かれ、車が主人公の隠喩であることが判明する。この観点からすると盗まれる瞬間、唐突に登場する主人公の「赤いリュックサック」は、対称性の論理のもとで車の積み荷の赤いリングが強奪されることに呼応して生じたフィクショナルな存在物であることが分かる。

そして物語の結末に主人公が発見する宿（壊れた車）は、他ならぬ自己の発見であり、すなわち「自分探しの旅」という「真実」が見出せられる。反復される抽象的な描写と物語の循環構造から、この「自分探しの旅」は終わりのない繰り返しであることが暗示される。

第二章は『北風が吹きすさぶ午後』（『北京文学』1987年第5期）の分析となる。主人公であり語り手の「私」の、分裂的な自己像からもたらされる不安定性が論理形式となって、この物語は展開する。見知らぬ男から身に覚えのなく、かつ既に死んでいる友人を押し付けられた主人公は外部から強制された状況を内面化する。それによって冒頭で示された分裂的な身体像はなくなり、現実と統合された自己像が描かれるが、主人公はこれによって新たな分裂を引き受けることになった。この分裂は「余華」という作者と同名の作中人物を用いたメタフィクションの構造によってもたらされる、物語言説での分裂とも合致している。

この物語は人間のアイデンティティの形成という「真実」が引き出される。すなわちアイデンティティとは外部から与えられる、あるいは強制的に自己の内面へ入り込んでくるものとして統合されるのみならず、まさしくそれによって新たな内面の葛藤が生じうるという真実である。

第三章で分析する『四月三日の事件』（『収獲』1987年第5期）は先鋒期の三作目であり、かつ初の三人称で書かれた小説となっている。主人公である「彼」が想像する陰謀がゆるぎないものとして物語は展開する。その過程では、【想像⇒確信】という内面の論理形式が絶対化される。すなわち想像が現実によって否定されたとしても、否定されているがゆえに陰謀は確かであるという思考回路の盤石さが描かれている。一方で語り手は、一貫して主人公に内的焦点化をしながら、例外的に主人公の知覚しえないことを語り、括弧を用いて盛んに存在を強調する叙述が目立つ。もっとも特徴的な点は、物語内容の時間を交錯させた語りである。これらを検討していくと、語り手も陰謀を信じて疑わない、主人公に近い存在としての潜在的な人称性が措定される。

以上の観点で序盤と結末を見比べると、語り手が非焦点化して語ったハーモニカの音が主人公の内面で陰謀と結びつく。こうして陰謀の正体が自分にふりかかる死への恐怖となって確信される物語の全体的な構成と、ハーモニカの音が並行して描かれていることが分かる。物語は人間の抱える不安が現実のあらゆる事象と密接であるという恐怖と、現実がいかなるものであっても内面の不安が絶対的であるという「真実」が示される。

第四章は転折以後の一人称小説の例として『名前のない男』（『収獲』1995年第1期）を分析する。主人公の来発は何と呼びかけられても、それが自分の名前だと思って返事をしてしまう愚か者として周囲から嘲笑される。しかし主人公の愚かさは、出産のときの事故に由来するものと明示される点で、先鋒期の不可思議さは希薄化されている。

一方で、【呼びかけ⇒応答】という規則のもとで物語は進行しており、約束が破られるという出来事によって規則の失敗が象徴され、結果的に主人公が「来発という名前だけには返事をしない」という規則の例外を獲得するという形式的な展開が見られた。その例外を物語言説で行使することで、作中人物の内面の真実を描くという技法は、先鋒期の「虚偽の形式」と共通するものである。

第五章は転折以後の三人称小説の例として『黄昏の少年』（『作家』1997年第1期）を分析する。このテキストでは、空腹の少年が屋台のリンゴを盗み、屋台の主人・孫福が少年に罰を与えるという全く不可思議でない物語展開がなされている。

一方で、叙述においては時間の指示子を用いた語りの焦点移動が特徴的であった。それによって、焦点人物である孫福に非焦点化して語られる例外的な箇所のうち、少年が黄昏の彼方に消えていく空間的遠景と孫福の過去の幸福な家族写真を描写した時間的遠景が重ねられた結果、彼の満足げに懲罰を加える現在の姿と家族と共にいる過去の幸福な姿が象徴的に重なるという技術的な試みが見られた。これは

過去の苦しみと幸福が現在の彼にとっての内面の真実であることを示しており、ここにも「虚偽の形式」の技法が見出された。

第六章では「虚偽の形式」という観点からの全体のまとめと結論となる。先鋒期の作品として取り上げた『十八歳の旅立ち』、『北風が吹きすさぶ午後』、『四月三日の事件』は、どれも不可思議で虚偽的な物語の内容を持っていた。一方で、テキストにはそれぞれ「虚偽の形式」による固有の論理形式が与えられており、虚偽的な出来事はある種の必然性をもったものとして描かれていた。そして「虚偽の形式」が示す「自分探しの旅」、「アイデンティティの形成」、「内面の絶対性」という「真実」には、日常的な経験からは得られないような強度を持っており、「虚偽」を描いてこそ「真実」を提示することができるというアプローチが体现されていることが分かった。これが先鋒期の余華が用いた「虚偽の形式」の最も特徴的な技巧である。

転折以後の小説には、先鋒期に見られた不可思議で虚偽的な物語の内容はなくなっているながらも、作中人物の内面の真実を絶対的なものとして描くような、「虚偽の形式」の技法が活かされていることが分かった。すなわち転折以後の余華は虚偽的な内容でなくとも技巧を凝らした真実を描けるようになったのである。従来は「形式の疲労」によるリアリズムへの妥協としてネガティブに語られがちな転折であるが、本論によるとそれはむしろ余華にとって技巧の成熟を意味しているという新たな結論が導出された。

最後に、余華の独自性に関する一考として、カフカの『田舎医者』とのテキストの比較を試みた。比較対象にカフカを選んだのは、「虚偽の形式」がカフカの『田舎医者』に着想を得ているからである。両者は内面の出来事を真実として、じっさいに現実に参加させると言う共通点がある。しかし、『田舎医者』は不可思議な出来事が次々と起こり、そこにはいかなる論理をも拒絶するような、いわば自由連想的な物語の展開があった。それに対して余華は不可思議な展開に論理性を付与するという点でカフカの手法に独自性を加えていることを示した。

優秀修士論文概要

「語学力」を測るための方法および基準への探求

楊 甯

本論文は、言語テストにおける「語学力」の定義の明確化を試みるものであり、また、言語テストの結果を基にしたデータ分析を用いて、中国語教育への適用可能性を探求することを目的としている。

20世紀40年代、いわゆる「科学的測定時代」に突入する前、言語テストは言語教育および言語習得の測定道具として位置づけられていた。このような言語テストは、教育と学習の評価ツールとしての役割を果たしており、その構成内容と評価方法は、その時代の言語教育カリキュラムと教授法の影響を色濃く受けていた。このようなテストは、一般に「到達度評価 (achievement assessment)」と称されている。それに対して、特定の国や地域に依存せず、専門機関によって実施される言語テスト、すなわち受験者の語学力を評価することを主眼としたテストは「熟達度評価 (proficiency assessment)」として認識されている。このような言語テストは、受験者の学習時間や使用教材に制限がなく、さらにテストの合否が受験者の進学や就職などに大きな影響を及ぼすため、ハイ・ステークステストとも称される。本論文は、受験者の語学力を測定する言語テストに焦点を当てている。

現在、リスニング・スピーキング・リーディング・ライティングの4技能を中心に、主観テストと客観テストを組み合わせた形式で実施されている言語テストは、一般的に認知されている言語テスト形式と言えよう。これら二つの評価方法の根本的な差異は、評価の手法によるものである。客観テストは、評価結果が採点者に依存しない特性があるため、公平性や人件費の観点から多くの場面で採用されている。しかし、客観テストを通じて得られる結果が受験者の真の語学力を的確に反映しているかについては疑問視されている。特に、選択式客観テストが主観テストよりも答えやすいという点で批判されることが多い。

一方、主観テストは評価結果が採点者の主観に影響されるため、統計学が重視される現代では、その評価の変動性から計量としての取り扱いが難しいという側面がある。それにもかかわらず、文語運用や口頭表現を評価する際には、主観テストが最も効果的とされている。主観テスト評価の主観性や客観テストの制約などそれぞれの問題点に対して、受験者の語学力を的確に測定する言語テストをどのように設計するかは、言語テスト研究の重要な課題となっているであろう。

本研究では、まず、言語テストを通じて測定される語学力の定義、言語テストの現状やその進展、さらには言語テストの目的や意義に関する基本的な理論について概観する。次に、客観テストと主観テストのそれぞれの制約点を詳述し、機械学習が言語テストにどのように取り入れられるかの可能性を探る。その上で、言語テストに関する知見を基に、中国語教育に対して向上策を提言する。

本研究は序章と結論を除いて、6章からなっており、各章の内容の概要は以下である。

第1章では、一般言語学と第二言語習得の視点から見た「語学力」の定義をまとめ、その上、言語テストで測定すべき「語学力」を定義する。一般言語学における言語に関わる能力の論議の起源として、

Chomsky (1965) の考え方を無視することはできない。彼は、「理想的な話者」が所有する能力を言語能力と言語運用能力の2つに分類すべきだと主張する。この考え方はその後、Hymes (1972)、Canale & Swain (1980)、Canale (1983)、Bachman (1990) らによってさらに発展を遂げた。彼らの研究により、「言語運用能力」は「談話的能力」、「社会言語的能力」、そして「方略的能力」の3つの要素に結びつけられて認識されるようになった。「言語運用能力」に関する理論は進化を遂げたものの、それはChomsky が構築した枠組みの中での発展であると考えられる。一方、第二言語習得分野において、Faerch & Kasper (1983) は、第二言語に関する知識を「宣言的知識」と「手続的知識」の2つ区分できるとされている。この考え方を受けている吉田 (2006) は言語の運用を個別に考えられるべきであるという立場を取っている。しかしながら、木村 (2020) は、Faerch らの主張を基に、知識の獲得過程は手続的知識の範疇に属するという見解を示している。本論文は、これらの視点を参考にしつつ、言語テストにおいては文法知識やそれを運用する能力だけでなく、目標言語に対する認知能力の評価も含めるべきであるという立場を取る。

第2章では、言語テストに関する理解を深めるため検討する。この章は主に3つの視点で言語テストに迫る。初めに、試験実施者としての視点を採り上げる。試験実施者としては、言語テストは学習の各段階での成果を確認する手段であり、同時に受験者の総合的な語学力を評価するためのものとなっている。次に、受験者としての視点を考慮する。彼らにとって、大規模な言語テストは就職や進学といった人生の重要な節目を迎えるための手段となる。第2節では、具体的に英語と中国語の大規模な言語テストを例に、その内容構成を詳細に解説する。そして、第3節では、現代の言語テスト研究の主要な動きや大規模言語テストの最新のトレンドについて総括する。

第3章と第4章での議論の焦点は、客観テストと主観テスト（特にスピーキングテスト）がどの程度受験者の「語学力」を包括的に評価することができるか、そしてその際に直面する課題と限界についてである。これらのテストの間の基本的な違いは、評価の基準に端を発する。一言でまとめると、客観テストは採点者が誰であるかに関わらず一貫した結果を生むのに対し、主観テストの結果は採点者によって変動する可能性がある。

今日の言語評価の風景において、客観テストは受験者の語学力を評価する主要な手段として広く採用されている。しかし、その普及にもかかわらず、完全に瑕疵のない評価手段であるわけではない。客観テストが直面する最も重要な問題は、異なる難易度の問題にどのような配点を設定すれば、受験者の実際の語学力を最も公平に反映させることができるか、という点に集約される。

一方で、スピーキングテストなどの主観テストの議論では、異なる問題点が浮上する。試験官の存在が必要かどうか、そして試験官の主観に起因する評価の変動をどのように最小限に抑えるか、という問題が中心的な議論となっている。

第5章では、早稲田大学文化構想学部・文学部1年中国語春期統一試験における2020年度と2022年度の成績動向を詳細に分析する。2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、学校での会場試験実施が難しくなった。その結果として、非会場型のオンラインテストへの移行が必要となり、その過程で一部の問題における未回答率が顕著に高まるという状況が生じた。それに対して、2022年度春期には「理解度確認チェック」という統一試験とほぼ同じ形式の「小テスト」が導入された。

この背景をもとに、本章では以下の3つの主要な課題に焦点を当てる。第一に、「理解度確認チェック」が統一試験全体においてどのような位置付けを持つのかについての考察である。第二の課題として、授

「語学力」を測るための方法および基準への探求

業形態と受験形態の双方での変化の影響を受けて、2022年度の受験者の回答傾向が、2019年度の受験者と比較してどう変動したのかを明らかにしたい。そして最後に、先に議論した客観テストの問題点への対応策として、「0-n」採点法がどれほど効果的かに関する検討を行う。

第6章では、機械学習を用いて「理解度確認チェック」および統一試験の成績を基盤に学習者のカテゴリー化を試み、それが中国語教育の現場での適用可能性について検証する。機械学習を活用した成績分析は、集団の変化傾向を中心に据える従来のアプローチとは異なり、クラスタリングを通じて、各学習者の学習意欲や特性を予測する点において独自性を持つ。

結論の部分では、本論文を通じて議論されたポイントを総括するとともに、本論文の不足や将来の課題に関して深く探求する。本論文の不足は、主として以下の3点が挙げられる。まず、「語学力」の中に内包される認知能力の具体的な定義が不足していることである。次に、主観テストの制約を検討する上で、ライティングテストが十分に考慮されていないことである。最後に、機械学習を用いた分析において、「理解度確認チェック」と統一試験の関連性のみに焦点を当て、他の変数を考慮しきれていないことである。これらの不足を踏まえ、今後は「語学力」を的確に評価する言語テストの理想的なモデルの探求を目指したい。